

「白壁フォーラム 大腸疾患の診断」

白壁フォーラム編集委員会 編

京都がん協会

多 田 正 大

白壁彦夫先生のご業績、人徳、人脈の大きさなどについては広く世の中に知れわたっており、今更触れる必要はあるまい。「胃と腸」でも一回忌にあたる第30巻13号において特集記事を組み、ご縁の深かった方々からお言葉を頂戴したばかりである。先生は大腸疾患にも情熱を燃やされ、若い学徒の先頭に立って、診断学の向上と普及、IBDの病態の解明のために、あえて旗手としての役割をかって出られた。その20年間の集大成がまさに本書である。それだけに研究会の重厚な歴史に圧倒され、先生への惜別の感慨を新たにしながら分厚い本書を通読した。

本書が刊行されるきっかけとなった大腸疾患研究会の生い立ちについては、西澤護先生の序文、中村恭一先生の“フォーラムの歴史”などの項に詳細に述べられている。白壁先生個人と白壁診断学への思いを込めた、卓越した内容の序文、追悼文であり、本書を一刻も早く世に出したいというフォーラム編集委員メンバーの熱い想いを感じとることができる。

本書の構成は炎症と腫瘍から成っており、それ自体は常識的な組み立てである。しかし呈示された症例とその読影に関する記述がすばらしい。X線・内視鏡像の読みをどのように組み立て、論理的に診断に迫るべきか、また病理組織学的検討の

過程で、疾患の本態を探るにはどうすればよいのか、具体的な症例を中心に白壁診断学を余すところなく披露している。難解な大腸診断学に対して取り付きやすい構成になっており、啓発させられるところが多い。

白壁先生は常日頃から、炎症性腸疾患の診断には点、線、面の要素を考え(PLA理論)、更に時間的経過をも考慮した四次元的発想で当たらなければならないことをわれわれに説いておられた。本書に記述された症例はその考えを忠実に実践した典型例であり、X線、内視鏡、病理いずれも卓越した画像が示されている。“症例から学ぶ”のコメントから、研究会において討論された状況が推測できるし、白壁先生の大腸疾患に対する真摯な考えを読み取ることができる。

研究会メンバーの施設で経験した小さな大腸癌の統計を基礎に、その組織発生と発育進展過程に関する論文が30余頁にわたって記述されている。大変な労作である。とかく多施設集計は施設間の診断能に差があると、信憑性に乏しくなりがちであるが、わが国の大腸診断学のエキスパートたちの持ち寄ったデータであるだけに説得力がある。ここではde novo癌と腺腫由来癌に区別して、その差違を明らかにしようとする意欲的な試みがなされている。ただし“現在一般的である癌組織診断



基準によって de novo 癌と腺腫由来癌とに分けられた”としているが、現実には大腸癌をみて clear cut に両者を区別できるものかどうか、筆者は悩んでいるだけに釈然としない成績である。

ともあれ本書は白壁診断学の真髄に迫る名著であり、若い研究者のみならず、診断学のベテランにとっても座右に置いておきたい価値ある書籍である。それにしても個人名を冠する書籍を発行できた白壁先生は、すばらしいお弟子さんに囲まれて、幸せな巨星であると思う。

● A4 頁306 図15 写真265
原色図372 表74 1996 定価
18,540円(税込) 〒520

医学書院 刊 ☎ 03-3817-5657